

序章 これこそ私たちが作っていく世界

いま自分がやろうとしていることが、その後の人生を決定づけるとリアルタイムで自覚できることは滅多にない。でも、アメリカン大学学生会会长として与えられた小さなオフィスでラップトップを前にして座る私は、自分の世界がひっくり返ることになるのを知っていた。なぜなら、深く隠してきた秘密を明かして、数ヶ月前には想像もできなくて無理だと思っていたことをやろうとしていたからだ。

私の手はキーボードの上で動きを止めた。永遠に私の人生を変えてしまう Facebook の「投稿」をクリックする準備はできているのに、ためらいが残っていた。きっとこんな反応があるに違いない。

「キモ」

「オエ」

「サイテー」

そして何より辛いのは、私自身が心のどこかで思っていた反応があること。「あ～あ、この子の人生も未来も台無しだね」。

この時点に至るまで私はずっと、「本当の私」と「私の夢」は両立しないと思い込んでいた。それまでの人生はこのふたつの間で常に引き裂かれてきた。トランスジェンダー女性であるという真実を大切にしながら、家庭やキャリア、満足な人生を手にいれることは不可能だということは、空の色と同じくらい確かなことだった。

21歳になるまで私は、社会を良くして家族に誇りに思ってもらうという夢を、アイデンティティよりも優先してきた。でも年齢を重ねるごとに、自分は何者かという核の部分に蓋をしていくのはどんどん難しくなっていた。大学に入る頃には、問題は私の存在に関わるものになっていた。これを考えることなく生きていくことはできなくなっていた。

もはや選択の余地はなかった。隠れてはいられない。他人の人生を生き続けることはできなかった。カムアウトするしかなかった。世界に向かって私はトランスジェンダーですと言う必要があった。自分自身として人生を歩みたかった。

1年と少し前、私はアメリカン大学の学生会会长に選出されていた。首都ワシントン北西の郊外にあるアメリカン大学は政治活動が活発な大学として知られ、政治に多くの足跡を残してきた歴史がある。キューバ・ミサイル危機の数ヶ月後にジョン・F・ケネディ大統領が「私たちの時代の平和だけでなく、永遠の平和」を呼びかけた場所であり、弟のテッド・ケネディ上院議員が当時のバラク・オバマ上院議員への支持を表明して2008年の大統領選の流れを作った場所でもある。

私はずっと政治、政治運動、政府が好きだった。自分のコミュニティをより良くし、世界に永続的なインパクトを与えるのに最適な方法だと思ったからだ。6歳か7歳の頃にホワイトハウスの存在を知り、そこで繰り広げられた歴史を学ぶにつれ、政治は私の天職になると確信した。

大学学生会会长になって、ジェンダー平等や人種的正義、経済的バックグラウンドに左右されない機会平等、そして LGBTQ 平等といったずっと大切にしてきた問題に取り組むうち、世界に変化をもたらせたとしても、私自身の痛みや不完全感は消えもしなければ薄まりもしないことがはっきりしてきた。

学生会会长の1年の任期の折り返しの冬休み、私は両親に本当のことを伝えた。以来、親しい友人には徐々に打ち明けはじめていた。そして2012年4月30日、学生会会长の任期最終日の朝、目覚めると、世界に向かって私はサラ・マクブライドですと宣言する決意を固めた。

美しい春の日、空には雲ひとつない。キャンパスの一角にある賑やかな広場を突っ切りながら、バクバクする心臓を抱えて学生会の事務所がある会館に向かった。

2011年から2012年、トランスジェンダーとアイデンティティの問題はまだ政治の中心議題ではなかった。私が打ち明けたとき、周囲のほとんどの人は自分のすぐそばにトランスジェンダーの存在があることなど考えたこともなかった。おそらく彼らが初めて会ったトランスジェンダーは私だった可能性が高い。少なくとも、彼らが知る限りにおいては。

アメリカン大学は進歩的な大学で、大半の学生は共感力の高い人たちだった。排他的ではなく、ゲイの学生も受け入れていた。それでも、大学がトランスジェンダーの学生に全体としてどう反応するのか知る機会はなかったし、ましてそれが学生会長となったらどんな反応があるのかわからなかった。

自分の机につくと、ラップトップを開いてFacebookを立ち上げた。そしてそこに至る数週間、書いては推敲し、何度も書き直した公開書簡を読み直した。

「これを書くまで長い時間がかかりました。21年間です」。投稿はこう始まった。

本日、私はアメリカン大学の学生会長の任期を終えます。学生会長であったことは私にとって信じられないほどの栄誉でした。この1年間に多くを学び、成長しました。個人的にも職務上も。キャンパス・コミュニティとして共に取り組んだすべての課題を誇りに思うと同時に、私にとっての最大の学びは、内なる闘いの解決でした。私のこれまでの人生は、ジェンダー・アイデンティティとの葛藤でした。

この1年の経験があったからこそ、私は最も深く秘めてきたことと折り合いをつけることができました。私はトランスジェンダーです。

この事実を私はずっと認識していました。でも受け止めることができなかつたのです。物心ついてからずっとわかっていました。

最後にもう一度読み返して、もうやるしかないと確信した。「投稿」をクリックしたら後戻りはできない。心の準備ができているのか定かでない世界に足から飛び込もうとしていた。抵抗しないのは、飛んだ向こうは陽が輝いて虹がかかっていると思うからだ。

当時、トランスジェンダーで有名な成功例はほとんどなかった。トランスジェンダーの人を知っていると答えるアメリカ人の比率は10%未満だった。以来この比率は劇的に上昇した。俳優のラバーン・コックスが『タイム』誌の表紙を飾るのはまだ先のことだったし、ケイトリン・ジェンナーはリアリティ番組「カーダシアン家のお騒がせセレブライフ」で無骨な親を演じていた。クローゼットの中にいた若者にとって、トランスの人々のプロフィールや物語に触れる事のできる貴重な窓はインターネットだった。同時に困難と障壁をあからさまに見せてくれるのもネットだった。

その1年前、トランスジェンダー平等全国センターと国家LGBTQタスクフォースによる驚くべき報告書が発表されていた。「あらゆる場面での不平等」と題された報告書は、冷厳な事実を突きつけた。

トランスジェンダーの4人に1人がトランスであることを理由に解雇されていた。

5人に1人がホームレスを経験していた。

41%が人生のいずれかの時点で自殺未遂を起こしていた。半数近くが命を絶とうとした。世界のヘイ

トが耐え難いものだったから。

それでも、20年生きてきて、この痛みに耐える理由になるものはないことを私は知っていた。最大の夢でさえも。マウスに手をかけて深呼吸をひとつすると、メッセージを投稿した。

賽は投げられた。もうできることはない。秘密は表に出た。

野火の如くニュースが広がるのに時間はかからなかった。洪水のようにコメントが流れてきた。友達だけでなく、よく知らない同級生たちからも。驚いたことに、メッセージからは例外なく愛とサポートがあふれていた。

ある学生はこうコメントした。「もしもいつか、自分自身としてオープンに生きることと夢や決意が共存できないと感じることがあったなら、今日を思い出してください。これこそリーダーシップです。あなたが私たちの学生会長であったことを今日ほど誇りに思ったことはありません」。

別の学生は書いた。「アメリカン大学の学生であること、そしてこれほど温かいコミュニティの一員であることが信じられないくらい誇らしい。まさにそう思える瞬間のひとつです。あなたのお陰で世界は少し寛容度を増して、少しオープンになりました」。

「アメリカン大学はマクブライドを誇りとする」。同級生が投稿した。

こうした反応に安堵して、私は背もたれに身を任せた。恐れていたようなことはなかった。肩の重しが取れたようだった。カムアウトしても世界は崩壊しなかった。未知への不安が、完全な自分になるのを邪魔することはなかった。自由を感じた。

感動していると、ドアをノックする音が3回した。溢れそうな涙を拭ってドアに向かい、会長室の大きなガラス扉を開けた。廊下に立っていたのは7人の男たち。多くがごちゃごちゃのギリシャ文字がプリントされたシャツを着ている。

私のフラタニティ（男子友愛会）の兄弟たちだった。その前の年、友達数人のプレッシャーを受けて入会したのだった。嘘の自分であることを自分に言い聞かせるための最後の悪あがきだったと言つてもいい。

兄弟たちは腕を前に伸ばすと、1人ずつ前に出て私を抱きしめた。友好的とはいえ、私が明らかな理由で関係を断ち切ったというのに、兄弟たちは直接伝えるためにやってくれた。私のことを大切に思っていると。フラタニティ・ブラザーでなくても、ずっとシスターなのだと。

彼らが去ると、学生新聞『ザ・イーグル』の編集長がやってきた。黒々とした髪と髭面にワイヤーフレームのメガネをかけた2年生のザックは、まさに新聞記者を目指す人という身なりだった。編集長の座に就いたばかりの彼は質問とリクエストを持ってきた。

「明日の新聞に学生会長としてのあなたと、あなたの実績を振り返る記事があります。お名前と代名詞を変更しましょうか？」。それが彼の問い合わせだった。

「ぜひ」。私の投稿に対する、そして彼自身の新たな職務に対する思慮深さに感謝しながら私は答えた。

咳払いをすると彼は次の質問に移った。立ち入った、あるいは不適切な問い合わせにならないかと心配しているのは明らかだった。

「明日の学生新聞に、カミングアウトの公開書簡を掲載するのはどうでしょうか？」

実は、そのことを考えないわけではなかった。だがすぐに、あまりに自己満足的行為だと打ち消していた。でもザックが提案してくれたことで、「それほど自己満足でもないのかもしれない。わかってもらうチャンスかも。私の旅は極めて稀なこととはいえ、聞いてもらって良いものかもしれない」と思えてき

た。逃すには惜しいチャンスだった。トランスというアイデンティティに人の顔をつける意味で。誰であれ読んでくれる人に、私の人間味をわかってもらう意味で。同窓生や見知らぬ人にとって、私の言葉が、人の感情の中で最も強力なものである「共感」への入り口になるかもしれない。

「すごくいいと思う」。私は答えた。

「良かった。すごく。あ、でもひとつ……」。ザックは一瞬ためらった。「ちょっと長いんで、600字程度まで削らないといけません」。

1200字の公開書簡を半分にするため、私たちは学生新聞編集室まで一緒に歩いた。締め切り間際で混雑して慌ただしい編集部に入ると、部屋は沈黙に包まれた。みんなが私の噂をしていたところに踏み込んだのだ。この居心地の悪さは私の残りの人生を象徴しているのかと心配になった。少なくとも、大学を卒業するまでの1年間は。

隙間をとつて、コンピュータ1台が置かれた小部屋に進んだ。ザックと編集作業をした。言葉のひとつひとつ、思いのひとつひとつはどれも大切だった。でも優先すべきは記事のスペースだった。

1時間後、やっとおよそ600字まで削ることができた。その頃には私の電話は通話やテキスト、メールで爆発寸前だった。その中には、外部のメディアからのものもあった。もう一度、編集部の中を歩く心の準備をした。

ドアを開けると、再び沈黙が部屋を包んだ。でも今度はどこか空気が違った。みんな微笑んでいる。恐れていた「バカにする」感じの笑いではない。彼らの笑顔はどこか誇らしげでもある。素朴な「グッド・ジョブ」の笑顔と頷きだった。中には立ち上がって握手を求めてくる者もいた。

学生会長としての1年間、キャンパスを良くするよりも連邦議会でインターンすることに躍起の学生たちに、目の前のこと変革する機会を無視しないで欲しいと私は言い続けてきた。キャンパスは10年後、15年後に暮らしたいと願う社会の反映であるべきだと言い続けてきた。詰まるところ、AU学生会は政治的変化をもたらすスキルを持ったユニークな集団なのだ。ならば、その技能をキャンパスで活かすべきだ。私は問いかけた。「大学さえ変えられないのに、どうして国を変えられると思うのですか？」。

Facebookの投稿をしてから数時間のうち、そして学生新聞が発行の準備をするうちに、学内にざわめきが広がるのを肌で感じた。投稿は学内ばかりか学外に拡散されていた。そしてそれは揶揄や貶めではなく、祝福と興奮に包まれていた。その夜、ある学生は私の投稿に対する学生たちの反応が「まるでスポーツ大会で優勝したような」感じだと表現した。圧倒的な愛と喜びの放出だと。

ニュースが学外に伝わるに連れて、アメリカン大学は全米に向けてこう宣言する形になった。私たちはトランスジェンダー・アイデンティティについて学び始めたばかりだが、敬愛と尊厳をもって正しく受け止める。そしてAUの例を通して、これが私たちの作っていく社会なのだと。

その夜、みんなで一緒に私たちの大学は小さいながらもパワフルなメッセージを送り出した。トランスジェンダーの人々にとって明日は違うものになり得ると。

常に良くなるわけではない。一步後退を余儀なくされることもある。それは死であったり、ヘイト行為であったり、ノースカロライナのような州や軍で起きた権利の取り消しであったりする。過半の州における現状維持であったり、連邦政府がレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー、性的少数者に対する差別からの明確な保護をしないことによって、あまりに多くの人が解雇されたり住宅を手に入れられなかったり、ただありのままでいるだけでレストランから追い出されたりする危険に晒され続けていることもある。

それでも、前進する機会は増えている。支援の輪は全土に広がり、LGBTQ の住民を差別や暴力から守ろうとする市や州の努力、家庭や学校、市役所や連邦議会で変化を起こす私たちの連帯の声の力が強くなっている。

私がカムアウトした時、LGBTQ コミュニティとその運動がこれほど短期間にここまで進むとは思ってもみなかった。提唱者、活動家、ふつうの人々が暴力の炎とヘイトの灰を乗り越えて、違う社会を求めて闘ってきた遺産を受け継いで、私たちは社会正義史上最も効果的な運動のひとつに成長した。たとえ悲惨な敗北を味わっても、トランスジェンダーの人々、そしてすべての LGBTQ の個人個人は、歴史的前進を続けてきた。

私は自分自身の人生と職務を通じて、この目でこうした前進を目の当たりにしてきた。ふるさとデラウェア州で平等のために闘う中で、あるいは変遷する夫の愛で前進を目撃した。彼は自分の人生が失われつつある中でも、私の人生を可能してくれた。演説した民主党全国大会でも前進を目撃し、ありのままの美しさと真実を明かした上で祝福されるコミュニティと一緒に立ち上がって全国を旅しながら、日々目撃している。

かつてない前進は 10 年ほど続き、変化は可能であると知り、より良い日への希望を持つことは、私たちを動かす力となる。誰もが人生を 100% 生きることのできる社会に向かって私たちは進む。進歩はでこぼこで不規則かもしれない。それでも今、アメリカン大学でのあの夜から何年も経て、献身と思いやりで、より多くの明日を今日より良いものにできることを私は知っている。

(翻訳：草生亜紀子)

※原稿は作業中のものになります。完成版とは異なります。